
【新】 君がささやく頃に ドラえもんズ

salt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【新】君がささやく頃に ドラえもんズ

【Nコード】

N0244I

【作者名】

salt

【あらすじ】

擬人化しますのでお苦手な方はご遠慮した方がいいかと・・・私
は由香の名お桜凜が元のsaltです。都合により由香は消去し、
桜凜はIDをけしました。これからはsaltとしてよろしくお願
いします。これはもっともつと未来のお話、ある日ある町ある学校
で一人少女と11人の少年（9人）少女（2人）に出会う自分の間
違いがありすぎるため、文を直しながら更新していきます。

出会い

この世界は今よりももっともっと先のお話

今では技術が発達している時代だ。

しかし、これはバブルにしか過ぎない・・・

バブルが三年続き・・・やがて・・・

崩壊した・・・

そんな歴史を繰り返したせいかな、
木は枯れ、土は汚れ、風は無く、火が舞い、
水が干乾び、光が無くなり、闇に包まれ、

そして、空までもが闇に覆われてしまった。

こんな世界にしたのは、人間。

人間は、住めなくなった星を捨てた……。

やがて、人間がいなくなってから数年と言う月日が立つうちに、新たな命がそこに生まれた……

小さな小さな木の目でした

やがて木は増えて行き、水も、風も、光も空も、皆戻ってきました。

そこで生まれた生命。

進化を続けて……

世界は二つに別れた。

人間とネコが合成された人間とで別れた（ネコ人間とは、猫の耳、猫の尻尾がついている人間の事だ）

そんな人間が生まれてくることはめったに無かったのだが、100人に1人しかいないと言う珍しい人間、

ネコ人間は生まれながらに 火、水、土、風、光、闇、雷、菓、雲、
空、植、そして虹

の12個に分かれた・・・っと言うよりそれしかなかった、これは
ある学校に一人の少女が原因で大きな事に巻き込まれる11人のネ
コ人間の話

5XXX年Y月C日

ある日

Cat's town

ある町で

猫中央学校 3年A組

ある学校に

彼らは居た……。

彼らはこの後大きなことに巻き込まれるとも知らずにいつもと変わらない時間を過ごしていた。

朝の時間。皆はいつもとあまり変わらない様子で自由にやっていた。

エルは寝て…、キッドは朝飯食べて…、王は本読んで…、ドラえもんはドラ焼き食べて…、メッドは曲聞いて…、リニョはサッカーの本（雑誌）を読んで…、ニコフはぼーっとして…、

ドラパンはステッキ磨いて…、ジェドーラはお菓子の本をメモって…、ドラミは交換ノートを書いて…、ノラミャーコさんは縫い物して…、

いつもと変わらない時間を過ごしていたとき、彼女はやってきた

「転校生だ。仲良くしてやれよ」

先生はその言葉だけ言って教室を後にした。

ずいぶんともじもじした様子で立っていて、特徴的な耳も垂れていった。

満足な自己紹介にも恥ずかしすぎて出来ず、お辞儀だけをして一番後ろの開いてる席に座った。

授業が終わると少女は先生に呼び出された、この学校は領土の泊りがけ製でその部屋だった。

渡された紙には 「51493号室」 っと書かれていた。

猫人間のほとんどが家族や親に捨てられた人。

人間の世界ではこのような人間は存在してはいけない。 そのため捨てられるか、このCat's・town（ネコの町）に引き渡す

かのどちらかだ。

大抵は猫の町に入るための門の前か人間の世界につながる橋の途中
途中に捨てられている。

そんな子を引き取れば、領土製の学校に居れ、育てて行くのが大人
の猫達。

人間の知能を引いた猫で、字や言葉など、さまざまな人間用語が使
えるため、先生として過ごしている。

そんなネコ人間が集まった学校……。

「えつと……。あつありました！ここ……ですよね？」

51493号室とは、書かれていたけど、ちらりと「特別室」と書かれていたのでよくわからなかった。

入るだけ入ってみようとドアをノックした。

ガチャツ

鍵の開く音がし、ゆつくりとドアが開く。

「どなた？」 つとでてきたのは男の人…。

「ひっ……ひええええええええええ！？」

廊下と個室に響きわたった声はみんなを呼び寄せるように大きかった。

「えっ!？どっどうしたの!？」

ドアの向こうにいた人達は突然の悲鳴に駆けつけた

バンツ!!

「なんだ!? 今の悲鳴は!」

「やかましいですねえ? 一体なんですか?」

「うるさくてシェスタできねえじゃん!」

「?」

「騒がしいであるな、一体どうしたであるか?」

「・・・・・・・・だれ?」

「どうかしたのー?」

「お兄ちゃん! どうしたの?」

「うるさいなあ。」

「何何ー♪」

「んー?」

「ひっ・・・・・・・・ひやあああああああああ!?!」

この少女の名を”凜”^{リン} かなりの人見知りで男の人が苦手

好きな食べ物は、ドラ焼きとメロンパン（嫌いな食べ物は無い）

性格はかなりのやさしい系、何でもかんでもやってしまう、断れないタイプ

勉強は王ドラなみに出来るほうで美人差はノラミャーコさんといい勝負、

運動も一様は出来る

二重人格で、もう一人は月夜^{げっか}という、かなりの喧嘩好きで半分男

好きな食べ物 辛いもの（嫌いな食べ物は甘いもの）

オカマが大っ嫌いで見ればすぐになぐってしまふ。

運動神経抜群でオリンピック優勝出来ちゃうかもしれない実力と根性

性格はかなりの喧嘩好き男なみ、リーダー系で頼られるタイプ

勉強は人並みはできる美人差は…っと言うよりもの凄い美形

運動は何でもできるが、女モノはなかなか出来ない。

「……………ねえっ……………?」

「っ！」

呼ばれた様ビクついたように身を潜め警戒しているように見える。
唯一のネコの習性だ。

「はぁーどうしよう、コレじゃあまともに話せないよ・・・」

「これはかなりの人見知りですね・・・」

「ねえ？ 貴方名前は？」

「あっ、あっ……」

「大丈夫ー？」

「ひっ!？」

「……………もしかして男の人苦手ですか？」

ビクつきながらも凜は首とそつとたてに振った

「では、ドラミさんかノラミャーコさんが話したほうがいいのでは無いでしょうか……」

「そうですね、貴方の名前は？」

「あっ……凜と……いいいます………」

「凜さん？ いい名ですね」

「えっ？」

「俺は好きだなーそうゆう名前」

「あっ………ありがとうございます。」

少しうれしかったのか、頬をそめ微笑む、

「………話せんじゃん。落ち着きや話せんだな？」

「……………っ！……………」

「そうですね。いきなり問い詰めても仕方ないですし、少し落ち着きましようか。」

そういつてオレンジの髪の人がポットからお茶を出してそっと前においてくれた。

男の人と話したのはずいぶんと前が最後。久しぶりに話せたのか自

分でも驚いている。

少女が落ち着くまで皆は静かに個人製作をしていた。

だいぶ時間が経ったのかそろそろ話してみようと口を開いた。

「…………あのっ…………」

それ気付いたのか机に向かって座っていたオレンジ髪の人が横にゆっくりとすわり、

「落ち着きました？」

と微笑んで言った。

男に人に優しくされたのは初めてで顔を真っ赤にした。

「あああっはっははっはい！ あのっあああっありがっとうござりました！」

「…………はい、少し深呼吸。」

思わず言われたところに深呼吸……

「……落ち着きましたか？」

「はっ…はい、すいませんでした。。。」

「いえ、かまいませんよ。私もそうですから。」

「はぁ……？」

「私、女の人苦手ですてね…少しでも乱すと転げまわってしまうので…」

「……大丈夫なんですか？ 私女ですけど……」

「精神を乱さなければだいじょうぶ……」

かなり無理をして笑っているようなので無理をせずといって少し離れた。

離れたそばに緑の髪の子が寝転がりながら笑顔で質問をしてきた。

「リンチャンは、何族生なのー？」

「…………族生？何ですか…………それは…………」

そう答えた直後に皆が驚きの目を向けていた。…………

「えゝ知らないの？ネコ人間でも知らない人いるんだねー」

「…………？」

「私達皆は、それぞれ族生を持っているんです。

火、水、土、風、光、闇、雷。
雲、空、植、菓。

それぞれの特徴と心で変わります。 私たちの領土ではこの分類で
分けられています。

「私（王）でしたら”風”特徴は身軽さと警戒する心です。短足……
ですが…………」

「俺^{エル}なら”火” 根性と燃える心！暑き魂は燃え盛るぜ！！」

「俺^{キッド}の”雷”は守る心と強い意志！」

「僕はねー”土”！ 足と楽しむ心が僕の特徴なんだー！」
^{リニヨ}

「僕^{ドラえもん}だったら”水”特徴は平凡な心！えへへっ」

「我輩^{メツド}ならば”光”真実と見極める心は必要である。」

「……僕は……闇……明るい心……」
^{ニコフ}

「僕^{ジェドローラ}なら”菓”特徴は手と菓子心なんだ！」

「私^{ドラミ}は”植”です、愛する心と安らぎを与えます。」

「俺^{ドラバン}ならば”雲”暗い対応、寂しい感情…認めたくないがな。」

「私^{ノラミヤーク}なら”空”！踊る心と美しき音色です」

しばらくぼかんとした表情をすればそりと言葉を口にした

「……それ”力”のことですか？」

彼女の言葉に納得するように腕を組みながら

「まあそうとも言うな、何でだ？」

と質問を仕返した。

「それなら私にもあります。そうですか、族生ちからと言うのは”力”の事だったのですね？」

「まあ…な…」

頭を少々かきながら答える赤髪の青年。

凜は精神を集中するように瞳を閉じ、そつと手の平を天井に向けて相手に差し出すように虹色の光を放った。

「私にはよく分からないんですよ…この力は…特徴は綺麗な心と鬼神の間の手。よく分かりません。」

『なっ（えっ）！？』

皆がいつせいに声をあげた…

「……へ？」

ぽかんと相手の声を耳にした

過去

『なっ（えっ）！？』

皆がいっせいに声をあげ、ぽかんと相手の声を耳にした

「えっ？　どうしましたか？」

虹色の光が手から放たれながらも質問した少女　凜^{リン}

「なっ　なんで凜さんがその力を！？」

「…何故って言われましても…生まれたときから持っていたので…」

よく…」

「ちがう……唯一生まれながらその力をもてるのは大昔の世界の崩壊後、

世界の始まりとされている一つの気の芽だけだ……」

「生まれながらに持つのは不可能な話だ……。凜。君は何者……？」

「それは………」

「私にも分かりませんし……お答えできません………」

「えっ……」

「じゃあ何故そこまで分かっているんだ？」

凜は小さく下を向き再び上を見上げた

「よく分からないんです。」

ほんとに小さなときの記憶なんてありませんし……ところどころ私の記憶は消えてるんです…。

なので理由はお答えできません、皆さんは”力”を生まれながらに持っていますが

私は違います。それだけは分かります。」

悲しい表情を浮かべれば見上げていた顔を元の位置に戻し、

「貴方達みたいな仲のいい友達とは私との住む世界が違いすぎるのです。」

「貴方だってネコ人間なのに私達とどう違うっていうのですか？」

凜は小さくため息を付き　そして再び話し始めた。

「……お話ししよう。

でも、私に対する優しさなんていりませんよ？

先に言っておきます。」

私が生まれたのは森の中の小さな家でした。

とても裕福と言うわけでもなければ貧乏って訳でもありませんでした。

生活は楽なほうで、お母さんは私を生んでからすぐに他界し、祖母もすぐに亡くなり、私には父と祖父しか家族がいませんでした。父と祖父だけで育てられてきた私は小さい頃から男の人が苦手って訳でもあります。

どちらかというと、女の人のほうが苦手でいつもお父さんにくっついて過ごしている時が多く

男のお父さんの方が好きでした。

私がまだ幼い時に、突然森にやってきた人たちに絡まれ、私は友達と父と祖父とでその人たちから逃げた、森の木々は切り倒

され、
親戚や同じ学校の生徒が赤くなってその場に倒れているのを見ました。

友達が私たち家族に別の逃げ道を教えてくれ、私達はそこから逃げた。

しかし、その道は戻る道で私は捕まり他の友達は今と私の家族を捨てて逃げました。

悔しくても、何も出来ない私はお父さんと祖父に守られながら怯えていた。

その人たちは容赦なく、大きな斧をこちらに振り下ろしてきた、父が私を庇い背中に深々と斧が刺さった。。
私にお父さんの体重は重くそのまま倒れ、私を抱き守るようにうずくまった。

ガッ！　また音がしたと思えばドサリと隣に祖父が倒れてきた。
こちらに顔を向けにこりと微笑めば最後の一撃と共に動かなくな

こちらに祖父から出てきた赤い液体が伝って来てそれを見せないようにお父さんは自分の胸板に私を押し付けた、

しばらく…真っ暗な中静かにお父さんの鼓動を聞いていれば、弱弱しくなってくる鼓動。

ドカッ！　また音がしたと思えばお父さんから衝撃が走った。

胸の鼓動はなくなり、音がする直前にお父さんは

「いっ…きろ。。。愛してっ…！」

小さな声でいい腕の力が抜けた。どっしりと体重が乗っかり苦し
くて…悲しくて…

「出て来い、ガキ。」

二人を赤く染めたその人が言った。

しばらく黙り、身をお父さんの下に潜めたが相手がお父さんを蹴り
飛ばし、明るくなった視界目を見開いた。

周りは真っ赤な炎と液体で一杯だった、その光に包まれ、黒く影を
作り立ち尽くす人間。

「やっと出てきたか、クソガキ。後はてめえだけなんだよ。」

大きく振り上げた斧が目の前にあり小さな声で

「死ねや」

斧が行き酔い良く振りかかってきた。

気がつけば、周りの炎は消えていて、そこに居たのは私だけ。
斧や棒を持っていた人間は皆私の前に倒れていた。

手と服を見れば真っ赤で恐ろしくなった。安心感を求めて父を探

した。

家族は家のベッドで目をつぶっていた。
だから潜り込んだ。でも、いつもの温もりはなく、寒かった。

家族を母よ祖母の墓の近くに穴を掘り、その中に二人を入れて土をかけた。

焼け焦げた森に食べ物が無いか探しに言ったとき、死に掛けている木の芽を見つけた。

近くに水があったので少し与えた。その時、いきなり木の芽から声がした。

「有難う、心優しい少女。」

「あっ…あっ…」

「…びっくりなさったでしょうけど…水をくれて有難う、さあ、復活の時です！」

その声と共に回りに緑が戻ってきた…

燃えたものは全部戻ってきて正直目を疑った。

「私は復活の芽といいます。世界はこの森から始まりました。」

「……森は戻ってきても……お父さん達は戻ってこないもん……」

そうやってしょぼくれて、「水、どういたしまして」

それだけを言い残して立ち去れば、後ろから暖かいものが流れて、そのまま気を失いました。

気がつけばこの力を持っていて、ここCat's・town（猫の町）に居ました。

コレが私の”力”の理由です。」

凜は悲しそうに笑ってこういった

「……私が男嫌いなのも、友達と言うものを信じられないのも、この力も……全部あの森から始まった。」

「サイテーなヤツらだぜ……」

俯いてた金色の髪の人がボソつと言った

凜は少しカツときたのか

「私に対する優しさは、いらないと先ほど言ったはずですよ。」

「優しさはいらないっか……………」

そんなんだからできねんじゃねえの?」

赤いさらさらの髪の人が少し強い口調で言った。

「っ!……………」

その言葉に少しズキッと着たのかそのまま俯き

「確かにね、僕達と生む世界が違う、けど君も僕らと同じネコ人間だよ？」

皆おんなじ、仲間だよ？」

「族生が違って、性格やタイプが違って、仲間です。」

「口ではそう言っても実際に起きれば、すぐに嘘になります。身に染みて体験した私はいえます。」

「……………うそになんか……………ならないよ?……………」

「嘘です！そんなの、絶対に嘘です。」

そんなこと言って、また私を裏切るんですよ……………皆そうでしたから……………だから信じません！」

そう強い口調で凜は叫んだ

そして金色の髪をなびかせながらその人が叫んだ

「甘ったれた事抜かしてんじゃねえよ!!」

ぴたりと言葉が止まった・・・

そして再び金色の髪の人が話しはじめた

「友達ができねえだの……………裏切られたから信じられねえだの……………住む世界が違うだの……………」

相手も信じず 裏切られた事をいつまでもいつまでも引きずってん

じゃねえよ！

うだうだ、うだうだ……イライラすんだよ！」

その人は強い口調でそう言う

「……………すか……………」

「ああ？」

突然凜が叫び始めた。

今までの詰まっていた思いが一気に言葉によって出てきた。

「貴方達に何がわかるんですか！？」

友達ごっこして 都合のいいときだけ仲良くしていらなくなれば捨てる……

それじゃあただの操り人形ですよ！」

泣きながら叫んだ……

「分かってませんね……」

オレンジの髪的那个人が優しく話し始めた

「貴方は友達ができないんじゃない、友達を作ろうとしていないんですよ。

思い出して見てください、貴方のその出来事がおこる前……たくさん友達がいたじゃないですか、
どうしてそんなに友達がいたのか、思い出してはいかがですか？」

凜は言葉が出なかった………

友達

そしてしばらくの沈黙————
静かな時間が流れた……

凜が話し始めるのをそつとやさしい目で待った、

「思い出す……ですか……」

俯いた口からこぼれるように出てくる苦痛の言葉。

「昔の事なんて……覚えていたって仕方ありません……
それに……」

凜は、黄色の髪の人に向かって話し始めた

「確かに、裏切られた事をいつまでも引きずっている私はただの弱虫です、
でも、本当に悲しかったんです、つらかったんです、いつまでも続く
かと思っていた仲が
突然壊れてしまった。

そんな大きなショックを抱えながら生きてきた私はもう弱くありません、

私だって…皆みたいに仲良く明るく過ごしたいですよ……………」

さつきとは迫力が弱まり、悲しげな表情で話した。

俯いている顔からきらびやかな雫が数的…続けて落ちた

「だったら、僕達が友達になってあげるよ……………」

「えっ……………」

その言葉と共にゆっくりと顔が上がり雫が頬に伝いながらも驚きの表情を前にした。

そして優しい言葉で、青い髪の人が話し始めた、

「僕達が君の友達になってあげる、友達が増えればつらい思いをしなくてすむよ？」

それに君はもう僕達の友達だよ！」

それに続き、黄色の髪の人話し始めた

「友達ってもんはな？ 仲良くするだけの関係じゃねえんだよ…
つらい事も打ち明けて、皆で解決して、
一生消えない関係になるんだ」

伝え終わるも凜はまた下を向きまた数的雫をこぼしながらも口を開いた。

「でも、私は今さっき貴方達を傷つけたばかりなんですよ？」

「それでも、友達友達。喧嘩しようが何しようが絶対に切れないんだよ。
それが、

本当の友達って奴だろ……?」

最後の言葉にピクリと身体を反応させれば振るえる声で泣き声を殺しながら

「……………優しいですね。」

黄色の髪の人にはニッと笑い

「ったりまえだろ? そんなつらい過去を背負ってきたのに冷たくしたら
そいつは友達じゃねえな」

凜は打ち明けたように語った

「私は意地を張っていました。

また裏切られたら怖いと思って作らなかったのでしょうね、でも、もう一度だけ信じて見ますね

貴方達なら本当の友達になれるかもしれません」

———E t e r n a l f r i e n d ?———

顔を上げ、泣き顔でそう尋ねると……

皆は目を合わせ……

そして大きな声と笑顔で……

YES!

海だ！

月日が経ち……ドラえもんズ達は平和な毎日を過ごしていた。

新しい友達 凜もすっかりなじみ、

いまや誰にも邪魔されることの無い、永遠の友情がそこにである。

ドラえもんズの学校では夏休みの真っ最中であつた……

とは言っても学校に止まりこみなので友達との同居生活である

夏休みの初めの頃……しつかりものの凜とオレンジの髪……王は、宿題の真っ最中だった

そんな中、暑い暑いっど胸元を掴んでうちわを仰いでいた赤い髪……エル マタドーラだ、

「あっちー なあー王ー凜ー扇風機かクーラーかないの？」

「あるにはありますよ？でも窓を開けてれば十分涼しいですし……電気代がもったいないですよ」

「そんなに暑いなら外に行つて風にでもあたたてくればいいでしょう？うるさいんです。」

勉強の邪魔をするなら出て行つてもらえませんか？」

「王ドラさん……それはいいすぎではないですか？」

苦笑いしながらエルをかばう凜

エルには凜々しい凜の姿が目に見えていた

「凜ちゃんは本当に優しいんだねえ、王とはまるで違うね」

調子にのるエルマタドーラに軽くペシッと叩き

「って！」

「調子にのらないでください！ エルマタドーラも宿題なさったらどうなんですか！」

へいへいっと叩かれた頭をさすりながら黙り込むエル

「……王ドラさんこの問題ですがここはこの式でよろしいのでしょうか？」

「どれどれ？ あゝこれは難しいですね、凜さんがいいと思えばいいのではないですか？ 私もその式ですし……」

「そうですか、ありがとうございます！」

勉強の話で忙しそうな二人に何を言ってるのかさっぱり分からず天井を眺めるエル……

（俺にはついていけねっ）

そう思い昼寝を始めようとしたとき……

バンッ

「きゃっ！」

「わっ！」

「ぶっ！」

突然ドアが開きドア側で寝ていたエルマタドーラの頭にドアが直撃した。

机に向かっていた二人も飛び上がりプリントが散らばった……

「エル、王、凜ちゃん！ 海行こうよ！」

突然ドアを開け入ってきたのは子供のような、緑の髪……リーニョだ

「ってっ」

「あれっ？ エルどうしたの？ 具合悪そうだねっ♪」

「お前のせいだろ……！」

「えっ？」

「突然入ってこないでくださいよ！ ビックリするじゃ無いですか！」

「入るときはノックしてね……」

っと怒ってる王とエル 苦笑いする凜

「ごめんねー凜ちゃん、王……」

「俺はっ!？」

わいわいとなにやらやってると……

「これこれ、ノックしてから入らなきゃだめっていったであろ？」

「そうだったけ？」

「あららっ」

ずっこけるピンクの髪のメッドの姿があり
そして後ろにはわらわらと沢山の姿……

「王!凜!エル! 海だぜ!海!」

「久しぶりの海だー楽しみーV」

っとはしゃいでいる、青髪のドラえもんと黄色髪のキッドの姿

「…………ドラえもん…………静かにね……」

「お兄ちゃん！キッド！そんなにはしゃがないで！子供じゃないんだから！」

「かわいいんだから！ふふ」

「困った困った。いきなり海って言われても用意がおいつかないよお」

「暗いところよりはマシだな。」

ドラえもんに少しの突込みを入れる茶色髪のコフに、はしゃいでいる二人を注意する黄色髪の赤いリボンのドラミ
そんなはしゃいでいる二人がよほどかわいらしいのか、和んでる桃色髪のノラミヤコの様
そしてなにやら用意で困っている茶オレンジ髪のジェドーラに、ちよつとうれしそうな暗所恐怖症の紫髪のドラパン。

全員がそろった日だった

「いきなり海って言われても普通、用意追いつきませんよ！」

少しあせる王ドラが言ってる側から……

「よしっ！終わった！」

「は？」

「行く準備完了！」

行く気満々のエル。

「言ってる側から貴方って人は………」

ちょっとあきれる王ドラ、自分の手を動かしながらごそごそと弄り

「あゝ」

心配そうに話しかけた少女、凜

「なんですか？」

「そんな色々言ってるのであれば先に用意の方を済ませたほうがいいかと……」

皆待ってるので………」

「えっ！」

ハッとする王、周りの皆はとっくに準備が終わっていて王を待っている状態だった

「早く済ませろよ」

ニタニタしながら話すエル、カチンときたのか王はエルの方に近寄ってきた…

「なっ何だ……っ!?」

”よ” と言う前に王がエルの足に蹴りを食らわせる

「いって~~~~~!!?」

つんとして用意を一分で終わらせた王

「それじゃあ！」

『行きますか!!』

皆、外出手続きを追え真夏の海へ目掛けて走り出した

「うわっっっぱいいいるねえ」

「あっちっアイス食おうぜ！」

「肌にあまりよくありませんが………」

「うっほー美人せいぞろい」

「わーいわーい！海だ海だ」

「そんなにはしゃぐと転ぶであるよ」

「……………暑い」

「日焼けしちゃう」

「あまりイケメンはいないわね。」

「暑いねえ、困った困った」

「むっここは明るすぎだぞ?」

「これなら皆さんでのびのび遊べますね」

ドラズは早速水着に着替えた(皆、下に来てたけど…)

男子軍はもちろんカイパン、ドラと王とメドとジェドは上を着ていて

女子軍はなんと言ってもノラミャーコがすごく、ピンクのはではでな水着だ

ドラミちゃんはチェック柄の水着で 凜は上に来ているのでどんなのかがわからない状態

「かわいいこちゃんっナンパしてこようっ」と

エルがナンパしようとしたがドラズ全員に止められた。

「だめだよぉ今日は皆で遊ぶんだから他人はだめ。」

「俺もちょっと他人と遊ぶのはな」

「私は絶対反対です」

「皆で遊ぶんだから！」

「我輩も水いやだが他人はちょっとの」

「……僕もやだ……」

「私もちょっと……」

「ほっとけば？」

「ナンパされた側も迷惑だと思うけど………？」

「私は興味ない」

「私もちょっと………」

皆が皆いやな顔をする

「チエツ！わったよ！」

「よし！じゃあ早速！………「アイスを食べおう！」

『ずるっ』　なんでそうなるの？キッド」

「普通は海に入るんでしょ？」

「あっそっか」

「ガサツなんだから！」

「うっせっへちやむくれ！」

「なっ！なんですっも」はいはい、そこまでそこまで…」

ドラえもんがドラミの口を押さえ付け二人の喧嘩はおさまった。

「じゃあもう一度……　早速海に入ろう！」

『おー！！』

喜んで飛び込むドラにキッドにリニョにエル

「こらこらちゃんと準備体操してから入るである！」

「そうですよ！」

そんな楽しそうな皆を見つめている少女 凜

レジャーシートにパラソルを付けおえ、ちょっと休んでいるところだった

隣ではいすに寝転がりながら寝ているノラミヤーコの姿

凜はちよつと苦笑いしながら遊んでるドラズに目を戻し
ぼーっと見ていた。

ぴたっ 「きゃっ！」

突然、頬に冷たいものがあたった 上を見て見ると
ジュースを手に王ドラが立っていた

「あっ王ドラさん」

「はいっジュースですよ。」

「あ、ありがとうございます」

王ドラの手から冷たいジュースを受け取った

「凜さんは、入らないのですか？」

「…………ええっちよつと……………」

「どうかしたんですか？」

「いえっ別に……………」

頬を少し赤くそめ、曖昧に答えた

王ドラと暫く話していると後ろに気配を感じたのか二人して見上げると……

バシヤッ

「きゃっ！」

「わっ！」

冷たい海水が突然かかった。

水をかけた張本人はバケツを持ったりニョだった。

「涼しくなった？」

つと何故かニコニコしている

「いきなり何するんですか！ レジャーシートがびしょ濡れじゃないですか！」

「えっへっへっ隙を見せたね王ドラ君」

つと言って笑顔で向こうにで走って行ってしまった

「まったく……………」 凜さん、だいじょう………… 「こっち向かない
てください！」

「えっ?.....どうしたんですか?」

後ろ向きで質問する王ドラ

「どうでしょう.....えっとえっと.....」

「どうしたんですか?」

気が抜け、困っていた様子だったので不意に向いてしまった.....

『あっ.....』

そこには上着が薄れて水着が見えていた

「すみまつ.....」「わあ~~~~かわいい水着だねえ!」

誤ろうとしたときリニョが見受けてしまい、結局ばれた.....

「.....つつ~~~~~／／／／／」

どうやら水着がコレしかなかったらしく恥ずかしくて海に入りたくなかったらしい……

「いいじゃん！すごいにあってるよ？」

「いいんじゃないの？」

「うっはっかわいい！めっちゃかわいい！」

「似合ってる似合ってる！」

「それにしても大段だのう………」

「……………かわ……………いい……………よ？」

「とっても素敵です！凜さん！」

「いいんじゃないかな？」

「まあ。似合ってるな」

「あっありがとうございます……………／／／／／／／」

ちよっぴり恥かしながらも塗れたまま立ち上がった。

「ちよっとタオルとってきますね。全部塗れてしまいましたので。」

そう言ってロッカーに予備を入れて置いたのかそこに向かい始めた。

「私も一緒にいきましようか？」

「大丈夫ですよ王ドラさん。」

はにかんで笑えばはだしのまま走って行き

ロッカーに付けば番号と同じ鍵をあけ中からタオルを出そうとごそ
ごそあさっていると

後ろに気配を感じたのか振り向いた。

「なあなあっ」

突然3人組みの男の人に話しかけられた

「ひゃっ！……なんですか？」

ちよっぴりながらも返事を返した

「俺達暇でさ？良かったら一緒に泳がね？」

「あっ…あの………連れがいますし…その…ごめんなさい…」

タオルを取ろうと振り向き全部取ったのを確認すればそれを抱えて歩き出そうとすれば3人組みの一人に止められた

ナンパだ、

「あっあの…まだなにか………？」

おどおどしていると腕を捕まれタオルも落ちてしまった。

「きゃっ！………離してください！」

「いいじゃんちよっとくらい付き合えよ」

「だからいやですと………」

言葉が続かなかった………

男嫌いの凜には話すのが精一杯で怖くて動けなくなってしまい泣きそうになり目をぎゅっと瞑った。

「凜さん！」

グイッ 「えっ？」

誰かに呼ばれ、引っ張られ気がつけば男性の胸元に居て

「私の彼女に何か用でもあります？」

王ドラだった

えっ？っと思った凜は話そうとしたが怖くて口が動かず、ただ震えてるばかりで

「チッ 彼氏もちかよ」

「残念だな。」

3人組みが逃げるように去って行った。

「あのっ……………王ドラさん？」

「もう大丈夫ですよ」

ちょっと赤くなりながら言った

「さっきのは……………」

「お芝居です、本気にしないでいいですよ」

「そう……………だったんですか？」

「まあ……………」

震える声を精一杯出して

「あっ…ありがとうございます……………ござい…ます…」

離れたあと優しく上着を着せられた。

「えっ？」

「これで大丈夫です」

「でもっ…」

「いいでから……」

「あ、ありがとうございます。」

「手伝いますよ」

ニツコリ笑い、落ちたタオルを拾えば歩き始め

「すいません……」

「大丈夫ですよ、」

皆の所に着けば何事も無かった様に王は皆に接した。
もちろん凜にも……

夕方………

「やだ〜もうちょっとあそぶ〜!」

「だめである、暗くなる前に帰るである!」

駄々をこねるリニョに厳しく怒るメツド

「また今度くればいいであろう?」

「でもでも〜」

「これ以上言うならおいていくのであるぞ?」

「やだ〜わかった帰るよ・・・」

「よしっいい子だ」

「今日のはのんびり帰りませんか?」

「どうしてですか?」

「ほら、思い出作りとしてですよ!」

「あ!それいいかもねっ!」

皆はのんびり歩いて帰る事にした

「わーキレイだよー！」

上を見て見れば空全体に星が見えていた
ポツリポツリと見えてくる星を眺めながらわいわいとにぎやかに道を歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0244i/>

【新】君がささやく頃に ドラえもんズ

2010年10月9日23時04分発行